

まつうら たけしろう
松浦 武四郎

- 江戸時代末期（幕末）から明治にかけての旅行家、探検家、地理学者、作家、出版者、古物収集家。（文化 15 年（1818 年）～ 明治 21 年（1888 年）：享年 71）
- 雅号は北海道人（ほっかいどうじん）、多気志楼など多数。
- 蝦夷地を探查し、「北加伊道」（北海道）という名前を提案。

- ・文化 15 年（1818 年）伊勢国一志郡須川村（現在の三重県松阪市小野江町）にて郷士・松浦桂介と妻・とくの四男として生まれる。
- ・藤堂藩の儒学者・平松楽斎、伊勢神宮の神官で国学者・足代弘訓などから学問を学ぶ。
- ・幼い頃から旅への憧れを抱き、17 歳から諸国をめぐる。
- ・天保 9 年（1838 年）に長崎で僧となり文桂と名乗るが、ロシアの南下という危機的な北方情勢を耳にしたことを契機に、**弘化元年（1844 年）に還俗して蝦夷地踏査に出発**（弘化 2 年（1845 年）から嘉永 2 年（1849 年）にかけて個人として 3 回、蝦夷地を踏査）。
- ・安政 2 年（1855 年）に幕府の御雇に抜擢され、安政 3 年（1856 年）から安政 5 年（1858 年）にかけて 3 回、蝦夷地を踏査。その成果を幕府に報告するとともに、蝦夷地事情を広く紹介するために『石狩日誌』などの紀行文や「**東西蝦夷山川地理取調図**」「**千島一覽**」などの地図を出版した。
- ・**明治 2 年（1869 年）には開拓判官となり、蝦夷地の名称について、明治政府に対して「北加伊道（ほっかいどう）」を含む 6 つを候補**（他に日高見道、海北道、海島道、東北道、千島道）と**する意見書を提出するとともに、アイヌ語の地名をもとに国名・郡名を選定した。**
- ・**武四郎は、「北加伊道」の名称に、「北のアイヌ民族が暮らす大地」という意味を込めた。**
- ・**江戸時代にアイヌ民族を苦しめていた場所請負制（特権的な商人が松前藩や幕府から蝦夷地各場所の経営を請け負った制度）の廃止などの持論の実現が叶わず、翌明治 3 年（1870 年）に開拓使を批判して職を辞し、従五位の官位も返上した。**
- ・行動力とともに、好奇心も旺盛で、幕末期には黒船来航の機密情報を集めるなど、情報収集能力も優れていた。なお、黒船来航時には、長州藩の志士・吉田松陰などとも交流した。
- ・古物収集家としても知られ、縄文時代から近代までの国内外の古物を収集し、69 歳のときには、自分を釈迦に見立て古物コレクションに囲まれた「**武四郎涅槃図**」を河鍋暁斎に描かせている。
- ・天神（菅原道真）信仰や山岳信仰、南朝（後醍醐天皇）への敬慕、古物収集熱などに導かれた、主に東日本への遊歴を、死の前年まで続けるなど、旅への情熱は、生涯衰えなかった。最晩年の 68 歳からは、奈良県と三重県の県境にある大台ヶ原に 3 年続けて登り、自費で登山道の整備、小屋の建設などを行った。
- ・明治 21 年（1888 年）、東京神田五軒町の自宅で脳溢血により死去。（享年 71）
- ・生地三重県松阪市小野江町には、生家のほか、武四郎の子孫宅に伝わったゆかりの資料を展示・保存する「松浦武四郎記念館」がある（平成 6 年（1994 年）開館）。なお、ゆかりの資料の内、1,503 点は、平成 20 年（2008）に国の重要文化財（歴史資料）に指定されている。